

## ◆生産者会議

### ヒトエグサ生産者会議

水産海洋技術センター本部駐在 上原匡人

平成 29 年 1 月 16 日に、恩納村ふれあい体験学習センターにおいてヒトエグサ生産者会議が開催され、生産者や漁協関係者等 14 機関 43 名（うち研究員・普及指導員 10 名含む）が参加し、活発な情報交換が行われた。ここでは、その概要について述べる。

#### 1. 開催趣旨説明

海の緑黄色野菜と言われるヒトエグサ（アーサ）の効用について、近年の研究成果に基づき紹介し、全国および沖縄県の生産量の推移を概説した。その栄養価と効用が見直されつつある中、全国的な生産量の減少を受け、ヒトエグサの需要は高い状況が続いている。県内でもアーサ養殖を新たに取り組む、あるいは復活させる地区が増えており、技術交流を図るべく生産者会議の開催に至ったことを説明した。

#### 2. 各地域における生産状況および問題点

今回の生産者会議では、各養殖漁場の航空写真や特定区画漁業権の範囲を投影しながら、各地域の 2015 年期と 2016 年期の生産状況と地域での課題や問題点等について、生産者自ら述べてもらう形式とした。多くの地域で、藍藻や珪藻などの雑藻対策が特に問題となっており、天然採苗（種付け）のバラつきもあげられた。

#### 3. 意見交換（情報交換）

本項目は、参加者より事前にアンケートをとり、特に意見交換の要望が多かった雑藻対策（スジアオノリ、藍藻、褐藻、珪藻等）と収穫方法（株だしなど）の 2 項目について取り上げ、各地域で行っている対策の共有を行った。その後、平成 28 年度の実産期に各地域で確認されたドタ腐れについて情報提供を行い、その対策方法を紹介した。

#### 4. 話題提供

①熊本県への視察報告（羽地漁協 新崎悟一氏）

平成 28 年 8 月に、羽地漁協のアーサ養殖部会と大宜味村水産担当の 4 名が、熊本県天草地域を視察した内容が報告された。視察のメインは収穫・加工機械であったが、熊本県では、洗浄や脱水の機械はノリ用が、乾燥機はイ草用が、それぞれ中古品として手に入りやすく、個人や数名のグループで行っている地域には、参考になる報告であった。

②種付けおよび貼り出し時期の検討（上原）

適切な種付けのタイミングや張り出し時期については、数例の報告を除いてほとんど情報がなく、生産者の長年の経験によるところが大きい。そこで、恩納村漁協の又吉直樹青年漁業士の協力のもと、試験区を設定して調査を進めており、その中間報告を行った。調査の結果、遊走子の放出する

タイミングは、①小潮から大潮にかけて、②水温が減少傾向を示して 25℃（もしくは 25℃以下）の温度帯を経験した後、再び上昇したときであった。このタイミングは過去に鹿児島大学が行った調査結果と一致するものであった。

③ヒトエグサ人工採苗の試み（水産海洋技術センター 岩井憲司主任研究員）

沖縄県では、現在でも養殖に用いる種（遊走子）を全て天然採苗に頼っているため、自然環境に左右され、安定的に種を確保することが困難な場合がある。このため、時期や場所に寄らず安定的な採苗が可能となる人工採苗の技術開発が、県内養殖現場から望まれている。しかし、従来の種板方式

では、管理が煩雑だけでなく、拡大も困難であることから、沖縄県でこの方法は行われていない。近年、熊本県が従来法に比べて管理がより容易な技術を開発し、実用化に向けて試験を行っている。沖縄県でも、人工採苗の技術開発に向けた予備試験を開始したところで、その第 1 歩として、プラスチック内で培養していた接合子を用いて、温度処理の有無による遊走子の放出量の違いについて検討を行った。その結果、遊走子放出前に温度処理を施した区では、処理を施さなかった区に比べて、確認された幼芽数が有意に多いことがわかった（いずれも暗処理は行っている）。

